

「未来へのたすき」



女子第29回全国高校駅伝大会 優勝 仙台育英学園高校 1区 三浦瑠衣

優勝して、釜石監督を泣かせたいよねって、みんな話していた。

優勝して、監督の下に走っていったら、目を赤くして抱きしめられた。3年間で一番うれしかった。三浦は、はにかみながらほほを緩めた。

女子第29回全国高校駅伝大会は2017年12月24日、京都市の西京極陸上競技場発着のコース(5区間、21・0975^キ)で開かれ、仙台育英が歴代2位の1時間6分35秒の記録で、23年ぶり3度目の頂点に立った。三浦は、1区を任せられた。高校駅伝の1区は、最も重要な区間。1区に着順が、レース全体の流れを作り、その後の展開を大きく左右する。釜石慶太監督は、昨年10月の段階で三浦の1区起用を決断。高いレベルで走りも、精神面も安定している。こ一番は三浦しかいない」と、起用の意図を明かす。1カ月前の東日本女子駅伝での三浦の1区起用は、本番を想定してのことだった。

ンバーは、京都入り後に伝えられる。釜石監督の「1区三浦」の声に、三浦は「正直、2区から5区と聞いていた」と、驚きを隠せなかった。1区は、競技場から平野神社前までの6^キと、各区間の中で最長。中間点の西大路四条から始まる上り坂は、残り1^キの西ノ京町で角度が厳しくなる。試走では、昨年度1区を走った武田千捺主将(2年)からスタミナ配分のポイント、レース運びの目印などのアドバイスを受けた。

監督の指示は「一桁の順位でたすきを渡すこと。2区にケニア人留学生のエース、ヘレン・エカラレ(3年)を置き、3〜5区もスピードがある選手が選ばれた。エカラレで首位に立ち、それ以降、どこからでも勝負を仕掛けられる布陣を組んだ。

ターゲット直後から、大阪薫英と筑紫女学園をマーク。トップ集団の中で隠れるように好走し、残り1^キの上り坂もペースを落とさず、トップと14秒差の7位でエカラレにたすきを託した。エカラレは900^キ付近でトップに立つと、2位に30秒以上の差を付けて、次につなぐ。3区以降、さらに貯金を増やし、2位に1分以上の圧倒的大差でゴールテープを切った。

元々三浦は、中距離の選手だった。800^キで県中総体に出場した三浦のスピードと、ピッチの効いた走りを見て、釜石監督がスカウト。走りからも「負けん気の強さが見えた」と、精神面の強さにもほれ込んだ。当初、私立への進学を考えていなかった三浦だが「全国で勝負したい」と、仙台育英に進学した。

強豪の日常は、三浦の想像を超えていた。起床時間は午前5時。午前6時から約1時間30分の朝練と、放課後は、午後4時過ぎから約3時間の練習。夕食を済ませ、8時30分までに帰寮しなければならぬ。洗濯や勉強を終えると、午後10時を回る毎日。毎晩のように「帰りたい」と母親に電

話をした。しかし、「辞めたい」とは一度も口にしなかった。

選手としての転機は1年の秋。補欠だが、全国駅伝のメンバーに選ばれた。大会をサポートするうちに「来年は都大路を走る」が目標になった。2年時は長距離に転向し、迎えた全国駅伝。チームは8位入賞を目指し、三浦は3区を走ったが、15位に終わった。そこから、三浦を含めチーム全体の意識が変わった。

「このままでは終われない」。練習での選手たちの目の色が変わった。口には出さないものの、常にタイムを競うようになった。「負けが選手を貪欲にした。練習量が増えても誰も音を上げなかった」と釜石監督。3年進級時、釜石監督は三浦に主将就任を打診した。三浦は「人数が多い2年生が、言いたいことを言える環境が必要」と断った。「副主将になり、主将を支え、走りチームを引っ張る」。自身初のインターハイ、国体で自己ベスト更新、各種駅伝大会で快走を続けるなど、言葉通り走りチームを支えた。

「1区を走らせてもらい感謝している。育英に進んだから、今の自分がある」。強豪校に進めば、誰しも成長するわけではない。大切なのは、自身がそこで何をやるかだ。高校卒業後、駅伝の名門、大東文化大に進学する。今よりも大きくなり、杜の都駅伝に帰ってくるはず。三浦は、自身の未来にたすきをつないだ。

Miura Rui

2000年1月4日、米山町千貫生まれ。仙台育英高3年。米山中時代、800^キで東北大会に出場するなど、中距離で活躍。高校進学後、1年から駅伝メンバー入りし、中距離から長距離に転向。3年時は、3000^キでインターハイと国体に出場し、それぞれ自己ベストを更新、大舞台での強さを発揮する。身長160^{センチ}。父、母、弟、祖父母、曾祖母の7人家族。好きな歌手は「back number(バックナンバー)」。